



「日本老残——20年後の長命地獄——」

吉田 寿三郎著

先生から清瀬リハ学院時代、公衆衛生の中で人口の老齢化とそれに伴う社会的、医学的対応策の必要性を学んだのは昭和40年頃である。

昨年のPT 仙台学会で老人と福祉というシンポジウムでシンポジストとして参加するにあたり、参考資料として読んだ中で、先生が書かれたこの本があった。著者の経歴が示すように、老人の医学的な面を基礎として国際的視野のもとに、あらゆる分野から分析しその対応策、展望をつぶさにまとめられているのが、この本の特長である。

目次を御紹介するだけで十分その内容を推測できると思います。

第I章、起、第三の人生とウェル・エイジング、第II章、承、西欧福祉社会の老人たち、第三章、転、人類の永存を開く発想の転換を、第四章、結、調和ある人間社会の創造、第V章、付、老化と老人病の理解のために、

の5つの章からなっている。

福祉みなおし論がでていいる今日、この本を読み終ると自分自身が加齢によって将来どのような立場におかれようとしているのか、世界の福祉先進国といわれる、スウェーデン、イギリス、ノルウェー等の老人政策を通して知ることができる。先進福祉国も収容ケアから大転換しようとしていること、著者が主張するように「真の人間社会」は人間の一生間におけるサービスの再分配が所得の再分配にもまして必須の要件であることが読みとることができる。

我々 PT, OT はもちろんのこと、福祉行政にたずさわる多くの人々に、自分自身も含めた将来の真の老人福祉が実現されるよう是非読んでいただきたい本である。

(小学館, 261 頁 1976)

(北村山公立病院, 理学療法士 駒沢治夫)

「森田療法の理論と実際」

岩井 寛, 阿部 亨 著

精神科作業療法は、一種の心理療法（精神療法）であると定義づけされている。精神療法には精神分析、ロゲセラピー、行動療法、森田療法等さまざまな治療法があり、日頃、折りにふれこれら関係図書を購読しているが、先き頃本書を入手し、一気に読んでしまった。この種の本にありがちな難解な文章とは異り、平易且つ明解で非常によく森田療法の理論と実際が理解できた。著者のあとがきにもみられるように本書は医者や心理学者が実際治療を進めるうえで役立つようにとの配慮から、理論と実際の両面にわたって、具体的に懇切丁寧に書かれている。内容は正統的な森田療法を紹介するとともに、その後の理論的変革や更には現代の視点から本療法の治療が述べられ、また森田療法の適応の限界と拡大を論じ入院療法、外来療法、特殊療法として催眠や自律訓練の併用も試みている。

興味深いことは、森田療法を「家庭療法」という言葉

で表現する一面があったことで、それは現在の生活療法即ち広義の作業療法と共通する考え方であり、また森田療法の中の「作業」のもつ意味も、作業することそれ自身に価値をおかず、症状をもちながらも症状のみにとらわれず目的行為を果すことに作業の意義があると考え、また生活の場を通じて新たな人間性の獲得と行為を通じての自己実現をはかる、この全人間的成長過程を治療の鍵としている点等、我々 POT の目標と志向を同じくし、共感を覚えるとともに誠に参考とすることが多大である。更に数多くの症例がその日記とともに紹介され、治療者側の態度や患者への働きかけのポイントが、その都度示されていて治療の経過が一目瞭然であり、読む者に示唆と啓示を与えずにはおかない。

(金剛出版, 272 頁, ¥ 3,800, 1975)

(医療法人清生園, 作業療法士 松本妙子)